

私の友達

関西創価高等学校

2年 岡本 莉奈

小学校の頃、障がい者の友達が行くなかよし学級というところがあった。そこへ行っていた近所に住む私の友達は、皆よりも少し字を書くのが遅かったり、喋るのが詰まったり言いにくいところをゆっくり喋るという感じで、小学校の頃の私はその友達がなぜなかよし学級へ行っているのか、考えたことが無かった。

そんなある日、小学校行事で車椅子バスケットボールを見に行った。私の勝手な先入観で、車椅子に乗っている人は他の人に押ししてもらっているか、自分の手でタイヤを回しゆっくりと進んでいるイメージだった。だから、車椅子バスケットボールの選手たちのスピードにとっても驚いた。そして、私の中の先入観が少し変わった。

その数ヶ月後、パラアーチェリーの選手が小学校で特別授業をしてくれることになった。教室と廊下には段差があったので、車椅子に乗っている人だから何かお手伝いしようと思っていた。しかし、その選手はずっと教室へ入ってきて授業をし、帰るときも誰の手も借りることなく帰っていった。不思議に思った私は担任の先生に聞いた。

「なんでパラアーチェリーの選手は障がいを持っているのに一人で教室に入ってこれたんですか。」

先生は、

「スロープを付けたからだよ。あと、障がいを持っているという表現は間違っているよ。障がいはあるものなんだよ。例えば視力が低くて眼鏡をかけてる人が眼鏡をかけずに生活したら、周りが見えにくくなるから生活がしづらくなるよね。でも眼鏡をかけたら生活しやすくなる。視力が低く生活がしにくいという障がいがあるが、眼鏡によってなくなった。車椅子に乗っている人も、段差があることで障がいがあるから、人の手助けがいるかもしれない。でも、スロープを付けると車椅子に乗っていない人と同じように一人で登り降りできるんだよ。だからこれからは、障がいがあると言おうな。」

と言った。

その時私は、なぜなかよし学級へ行っている近所の友達は眼鏡やスロープのように、何かを付けることで解決できないのか。また、その友達は生活する上で何の障がいがあるのか。何一つ知らなかったことに気が付いた。しかし何もわからないまま、小学校を卒業した。そして、別の中学校、高校へ通うことになった。

高校一年生の頃、なかよし学級へ通っていたその近所の友達と会った。三年ぶりだった。その友達は、詰まりながら言いにくいところはゆっくり喋っていた。

「この間、運動会があったんだ。楽しかったよ。そっちはどう。」

「楽しいよ。運動会はただただ練習してるよ。」

などと、色々な話をした。詰まったりゆっくりになったりする言葉を聞き逃さないように集中していた。私は、はっと気が付いた。もし友達の障がいが喋るのが苦手ということなら、私が集中して聞けばいい。集中して聞かなければ聞き逃す言葉を集中して聞くことが、視力の低い人の眼鏡のような役割で、車椅子に乗っている人のスロープのような役割になるのではないかと。友達の障がいは、私が集中して聞こうと心がければなくなるんだと。集中してその友達の話を聞くことがあたり前だった小学校の頃の私は、そのことに気がつかなかった。

障がいとは、持っているものではなくてあるもの。その障がいは、身近に居る一人ひとりの心がけで大きな障がいから、小さな障がいへと変わるのだ。そう教えてくれた先生や車椅子バスケットボールの選手、パラアーチェリーの選手、そして近所に住む友達にとっても感謝している。ありがとう。